

ダン・セノール／シャウル・シンゲル著「アップル、グーグル、マイクロソフトはなぜ、イスラエル企業を欲しがるのか？—イノベーションが次々に生まれる秘密—」ダイヤモンド社 2012年5月17日刊を読む

スタートアップネーション—イノベーションと企業家精神の国イスラエル—

1. 人は想像をめぐらすよりも、思い出にひたることを好む。思い出の対象はなじみ深い記憶であり、想像の対象は未知のことだ。想像は恐ろしいこともある、というのも、それには記憶と決別する覚悟が求められるからだ。
2. 新生イスラエルをつくるさまざまな種は、流浪を強いられた人々の想像の中から生まれてきた。流浪の歴史はきわめて長く、なんと 2000 年にも及ぶ。流浪の民はユダヤの地を離れ、国というものを失いながらも神への祈りを忘れなかった。その不屈の祈りによって、彼らは希望を膨らませ、祖先の地への思いをますます強くしていった。
3. イスラエルの建国とともに、この偉大な祈りは小さな国土に根付くことになる。根付いたその土壌はなかなか手ごわく、取り巻く環境も好ましくなかった。その昔、われわれユダヤ人の祖先がエジプトからイスラエルへの旅で横断したのは、広大な砂漠だった。そして現代、戻った祖国に待ち受けていたのもまた砂漠だった。われわれは完全に生まれ変わらなければならなかった。貧しい土地に帰ろうとする貧しい人間として、われわれは、欠乏というものの豊かさに気づいた。
4. われわれの自由になる財産は、人的資本以外にない。この不毛の地に財政的な支援は通用しない、通用するのは開拓者だけ、つまり何もない状況に立ち向かい必死に仕事をする開拓者だけだ。彼らは新たな生き方を工夫して、何もない地にキブツ、モシャブ、新開発都市、コミュニティを生みだした。必死に働き、自分自身を厳しく律していた。しかし同時に夢を見そして生まれ変わっている。
5. 彼らは理想主義者であり知識人だ。しかも積極的に自らの手で土地を耕す。その土地が不毛の地であり灌漑も不十分だとわかったとき、彼らは発明とテクノロジーを重視する姿勢に自らを転換した。
6. キブツは農業生産活動の母体になり農民は科学者になった。イスラエルにおけるハイテクは農業から始まる。耕作地が極端に少なく、しかも水不足という事情を抱えながら、それでもイスラエルは農業の先進国に成長した。多くの人たちはいまだに農業をローテクの権化と考えている。しかしその考えは間違いだ。なぜなら、イスラエルの驚異的な農業生産性に秘密があるとすれば、その秘密の 95 パーセントは、テクノロジーだからだ。

7. イスラエルは国の規模ではなく、差し迫ったさまざまな危険の大きさに立ち向かうだけの創造力を磨いてきた。しかも、防衛の最前線で発揮されるこの創造力は、民間の産業の礎にもなっている。軍事開発にはしばしばふたつの目的が与えられる。たとえば、航空分野における開発の成果は、民間と軍事の両方に同じように応用できる。軍は、民間産業の協力のもと、テクノロジー開発の母体になった。このおかげで、多くの若者が高度な機器に触れ、経営の経験を積んでいる。
8. イスラエルは領土と人口の両面でこれからも小さな国であることに変わりはないだろう。したがって、イスラエルそのものは決して巨大な市場にはなりえないし、巨大な産業も育成できない。しかし、規模の大きさから量の優位性が生まれるのに対して、規模が小さいからこそ、質の面に集中できるチャンスが生まれる。イスラエルにとって唯一の選択肢は、創造力を駆使して質を追求することだった。
9. イスラエルの初代首相、ダビッド・ベングリオンは言った。「専門家とは例外なく過去の事実を語る専門家だ。これから起こる事象を語れる専門家はひとりもない」。これから生まれる未来についての「専門家」になるためには、経験に取って代われるビジョンが不可欠だ。
10. 私は、これからの 10 年間で、以下に掲げる影響力のある三件によって科学と産業の分野にとって最も驚異的な 10 年になると信じている。
 - (1) その第一は人工知能の進歩。コンピュータの能力は過去 20 年間に何百万倍にもなっている。
 - (2) 第二は、科学分野における発見の爆発的な増加。これは、世界中で(主に中国とインドで)科学者の数が増加し、同時にテクノロジーも進歩するためだ。
 - (3) 第三に、ナノテクノロジーの出現。これによって、宇宙の最も驚異的な創造物である人の頭脳を解読できるようになるだろう。われわれのいまだ想像できない方法で、人間の潜在能力を明らかにし、コミュニケーションのさまざま仕組みを解明し、社会活動の課題をわれわれに教えてくれるはずだ。
11. こうした三つの進歩発展を考えることで、今日の視野のはるか先にある現象がわれわれの目の前に広がってくるかもしれない。病気の予防や治療をする、障害を事前に回避する、はるか彼方の宇宙空間に飛び出し、さらに深い海の底を目指す、そんな現象だ。ひょっとすると、文字通り最大のミステリー、つまり、人類生存の暗号や人類創造の秘話に迫れるかもしれない。
12. イスラエルは今、研究者が互いに力を合わせてこの壮大な旅に出発する態勢を整えようとしている。
13. 本書によって、読者の関心を喚起したい。これは、いつまでもスタートアップであり続ける国、イスラエルの歴史について述べた中間報告書と呼んでもいいだろう。その中で、著者のダン・セノールとシャウル・シングルは、過去に存在したものに異議を唱え、あるいは伝統的なものに対して疑問を投げかけた、そんな人たちの物語を書いている。彼らは「イスラエルの秘密」の生みの親であり、自分たちの国に、世界最先端のテクノロジー企業にとってきわめて重要な研究開発センターとしての地位を授けたのだ。

14. 今ダイナミックでエキサイティングな次の 10 年を目前に控え、イスラエルは新たな発見の時代に貢献するため、いち早くスタートを切り、国づくりを進めている。よりよい明日を目指すイスラエルの取り組みは、リスクを恐れず常に再生を図る姿勢を武器に、これから先何年も続いていくことだろう。新たな開拓の地に精力的にかかわることによって、われわれはこのイスラエルに平和をもたらす役割を演じるだけでなく、万人の健康や繁栄そして自由を求める人類の夢の実現に向けて、これまで以上の貢献をし続けたいと願っている。

[コメント]

Erik Brynjolfsson と Andrew McAfee のマサチューセッツ工科大学の 2 人の教授による著書「ザ・セカンド・マシン・エイジ」と並び高く評価された「START-UP NATION」の待望の日本語訳。砂漠の国イスラエルがなぜ緑あふれる世界一のイノベーションと企業家精神の国になったのか。そのプロセスがよく理解できる。「ザ・セカンド・マシン・エイジ」とともに、是非御一読を。

— 2015 年 4 月 30 日 林 明夫記 —